

Title	「記憶の心的述語」によって自己修復される際の語の選択に関する分析
Author(s)	千々岩, 宏晃
Citation	日本語・日本文化研究. 2019, 29, p. 214-227
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/73708">https://hdl.handle.net/11094/73708</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「記憶の心的述語」によって自己修復される際の語の選択に関する分析

千々岩 宏晃

## 1. リサーチ・クエッション

ある事故の記者会見で、亡くなった幼い子どもの書いた絵を見せながらご遺族の方が「こういうお絵かきをしている姿を覚え-印象に残っています」とおっしゃっていた。その際、誠に不謹慎ながら「なぜこの人は今、「覚えています」という語をカットオフ(中断)して、「印象に残っている」という語に言い換えたのか」と思った。

認知主義的な記憶観によれば、我々は常に何かを思い出し、それを内的に処理し、発話し、新しい情報を選択的に覚えたり想起したりしている。しかし、第一に、そのような行為が脳内で絶え間なく起こっているという想定は、それが“無意志”的なものでもなにかグロテスクである(松島 2002, p.23)。第二に、仮にもしそれが常に行われているのだとしても、「覚えています」という語がなぜ「印象に残っている」という語で言い換えられたのかの合理的説明を行うことは、記銘-保持-想起/忘却という説明装置では説明できない。では、ここで自己修復(self-repair)が行われたのはなぜか。単に言い間違いなのか。

本論は、言い換え、特に会話分析で自己修復と呼ばれる現象が、記憶の心的述語で用いられている場合について、それがどのような秩序の元に行われているのかを、分析・記述する試論である。

## 2. 検証するデータ群

本論で検証するデータ群は、日本語の雑談のデータの中で、記憶の心的述語周辺で自己開始・自己実行型<sup>1</sup>の自己修復が行われているものである。

データ中の修復を判定する特徴は、統語的、発話内容、音声的に特徴的であるもの、を含んでいる。音声的なものとしては以下のようなものがある。

1. カットオフ (-で表される音声の突然の取りやめ; eg. 「見-覚えている?」)
2. ラッチング (=で表される音声の接続; eg. 「知らない?=覚えてない?」)

本論で用いるデータは、日本語での雑談の録音・録画である。MacWhinney(2007)と稿者が収集したデータ(計約 40 時間)を利用した。本稿でこのようなデータを用いる理由は①相当数のデータを稿者が保有しているから、②テレビなどのインタビュー場面では編集が入っているために前後関係がつかめないことがあるが、このようなデータでは編集がなく、参加者のやり取りを十全に観察できるから、③非制度的場面の現象がインタビュー等に先立って解明される必要があると考えたから、である。

まずは音声データを荒く文字起こしし、記憶の心的述語が用いられている、あるいは修復によって中断された断片を抽出し、その中から自己開始・自己実行型の自己修復が行わ

れているデータを取り出して詳細に文字起こしした。結果、心的述語が使用されている断片は 135 あり、そのうち自己修復が行われているものは 21 あった(約 15.5%)。

### 3. 先行研究

本章では、自己修復に関する先行研究と、語の選択に関する先行研究を概観する。このどちらもが、個人の内的判断や認知過程を前提にしたり、類推したりする余地を残す認知主義的な要素を含む形で行われていた。

#### 3.1. 自己修復に関する先行研究

「自己修復」とは、言い間違いや語の適切性の不備などを、参与者同士がお互いに示すために行う発話のトラブル(会話のうまくいかなさ)に関する「対処」である。

会話の参与者たちは、なにかを言い間違えたり、相手の言ったことが聞き取れなかったりする。それらトラブルへの対処が、「修復(repair)」である。Schegloff, Jefferson and Sacks (1977)によれば、トラブルには「発話の産出(いわゆる言い間違い)」、「発話の聴き取り(いわゆる聞き間違い)」、「発話の理解(いわゆる内容が理解できないこと)」の3つがある。本稿では、自分の発話に対して、自らが修復を開始し、自らその実行を行う自己開始-自己実行型の修復を見る。これは「発話の産出」にかかわるトラブルであると言える。

さらに、自己修復の開始の位置(タイミング)には、3つのタイプがある。1つ目は、トラブルと同じターン内で行われるもの、2つ目は、ターンが移行する場所(Turn-taking Relevant Place)で行われるもの、3つ目は、隣接ペア後の第3の位置で行われるものである。

また、この修復されるトラブルは、必ずしも「言い間違い」や「誤り」などに限られない。さきほどの遺族の発話は、そのまま発話しても文法構造上は誤りや言い間違いと捉えられないだろう。むしろ、「こういうお絵かきをしている姿を覚え-印象に残っています。」という時、修復した後の述部「印象に残っています」は、統語上、格助詞「ヲ」格を要請しない。とすれば、この修復では修復によって文法構造上の齟齬が生じるにも関わらず、わざわざ文法的に間違った形で自己修復を行っている例なのである。となれば、そのような発話を行う上で、単なる誤りではない合理的な理由があると考えられる。

相互行為上の水準での修復が適切となるその基準は、研究者ではなく参与者自身が会話の場に応じて判断している。しかし、特に自己開始-自己実行型の修復は、「産出」にかかわるトラブルであるために、その原因を「単なる言い間違い」や「単に表現上の好みや癖」といったような、研究者が個人の内的過程への類推を許してしまうような現象でもあると言える。

#### 3.2. 語の選択に関する先行研究

語の選択(word selection / word choice)は、自己開始-自己実行型の修復、特に語の置換(word replacement)に大きくかかわると考えられる。発話者が発話する際の語の選択が、相互行為理解において重要であるとするものである。本研究と直接かかわるような分析・記述は管見の限り見られなかったが、語の選択に関しては様々な研究がなされている(Kitzinger et al. 2013, Kitzinger and Mandelbaum 2013, Morita 2015)。

Kitzinger and Mandelbaum(2013)は、お産のためのヘルプライン等での電話会話を分析し、助けを与える人が「私はプロだ」などと自己同一性に関して言及することがほとんど起こらない一方で、相手の話した専門用語を訂正したり、あらかじめある語が聞き手にとって利用可能かを確認するような実践が、話し手と聞き手の(その場での)アイデンティティを構成していることを報告している。ただし、これは語の選択にかかわってはいるが、他者開始-他者実行の修復であり、本稿の関心とは異なる。

また、Morita(2015; p.99)は、友達に手土産として持たせようとしている魚を評価するさいに、「この前よりちょっと大きくてね」と述べるデータを紹介している。Morita は分析で、「この前」と指示詞を用いて表現することが二人の参加者が共同の参照枠を持っていることを指示していると分析し、それを相手への協調(alignment)ないし態度(stance)を表していると分析している。

最も本研究の関心と近い Kitzinger et al.(2013)では、場所をいかに表現するかに関する記述がなされており、その3.1.2項で「確実な認識を得るための再表現(reformulation)」という使い方を記述している。Kitzinger らは以下のようなデータを示している。

Extract4 [Holt X(C):1;1;3]より抜粋

01 Les: ノース・キャドブリーで葬儀をするんだ[つけそれとも

02 Phi: [そう.ノースキャドブリーで

03 火曜日の12時から.

[中略]

09 Phi: でえっと(0.2)そう葬式はえっと12時で

10 そのあと.hwhhh ううんあれえー(0.5)あの墓-

11 キャリー墓地でそのあとね

[後略: Phiの父が2人用墓地を持っていることを説明する]

Kitzinger et al.(2013 ;p.46) [略・訳は引用者による]

Kitzinger らの分析によれば、「あの墓地(the cem-)」を「キャリー墓地(the Cary cemetery)」と言い換えることが、葬儀のあるノース・キャドブリー墓地と、埋葬するキャリー墓地とを区別し、聞き手の認識下で差異化させることを目的としてなされるというのである。

以上で見たように、語の選択という現象は、自己同一性の表示であったり、会話中の態度の表示や、あるいは聞き手の認識の確保といったような、相互行為の中で参加者の認知過程を類推するような形で行われてきていた。

以上で関連する先行研究を概観した。1章で述べたように、記憶概念に関連する語は、認知主義的な説明装置で説明されがちである。それに拍車をかけるように、本現象に関わる先行研究も、個人の内的判断や認知過程を前提にしたり、類推したりする余地を残す認知主義的な要素を含む形で行われていた。では、実際の活動は、これらの説明装置を用いて記述可能だろうか。4章以下で確認しよう。

#### 4. 分析、記述と考察

分析の結果、記憶の心的述語における修復は、形式上大きく分けて次の4つのタイプに分けることができた。それらはA：言い間違いの訂正 (self-correction)、B：語の置き換え (word-replacement)、C：統語的要素の追加 (increment)、D：発話軌道の変更 (changing-trajectory)の4つである。以下では、紙幅の都合上、研究動機に一番近接していると考えられるB類についてのみを分析、記述する。

##### 4.1. 語の置き換え(Word Replacement)に関するデータの分析と記述

本節では、Schegloff, Jefferson and Sacks(1977)で記述された「語の置き換え(Word Replacement)」の実践に対応すると考えられる断片を、本稿対象のデータから分析・記述する。今回の断片で観察した限りにおいて、ターン内で修復が起こる際に、記憶の心的述語が用いられていたのは修復の実行部分だった。

この修復が行われた断片は、さらに相互行為の参加者が行っているその場の一連の行為の繋がり(=活動)の種類によって2つに分類できる。4.2節ではある項目を「同定する」活動の中で、4.3節ではある項目を飛ばして「進行性を確保する」ような活動に用いられていた。それぞれに分けて、次節で分析・記述を行う。

##### 4.2. 同定の活動と共有された経験

本節で見るのは、「覚えてる？」等の記憶の心的述語が、参加者たちが互いに共有している経験を「同定」する活動の中で用いられているものである。次の断片を見てみよう。

###### 断片1. CallFriend japn6698 [見た]→[覚えてる?]

996 YU: ↑う::ん.

997 KN: ¥そうお昼であたし(h)h 思い出した. ¥=[.hh¥>ちよっと<聞こう=

998 YU: [うんなに?

- 999 KN: =聞こうと思って忘れて[たんやけ[どお, .hh なんか前あの  
 000 YU: [う::ん. [なにい?  
 001 KN: うどん屋でよねえ?[なんか~~変~~なのもらったよねえ?¥ehehe] 【確認要求】  
 002 YU: [.hhh あれさあうちで-うちでえ,] 【割り込み】  
 003 YU: パーティーの時見たでしょ. 【確認要求】  
 004 KN: えっ?見てないよ? 【失敗】  
 005 (0.2)  
 006 YU: あほんとお?[.hh あの::なぜか知らないけどマークが, 【反応→語り?】  
 007 KN: [う::ん.  
 008 KN: うん!=  
 009 YU: =うちの::,あの:::テーブルの上にい, .hh 【語りの開始】  
 010 KN: うん.=  
 → 011 YU: =パイナップルおいてあったの::見- 【確認要求】  
 012 KN: ↑う↑ん見[た見た見た. 【確認与え】  
 → 013 YU: [覚えてる?.hh↑あ↑の\_ 【反応】  
 014 (.)  
 015 YU: 後ろにい,[それが置いてあったんだけどお, 【語りの続き】  
 016 KN: [°↑う↑ん.°

ターゲットラインは、011行目の発話である。正確には「み-」と発話されているが、おそらく「見た?」を「覚えてる?」に置き換えていると考えられる。

順番に見ていこう。002行目で話し始める「あ」系の指示「あれさあ」は、参加者の間でうどん屋でもらった件の「あれ」というように共通の了解されていることを前提として話を進めているように聞かれうる(「文法的取り込み(grammatical anchoring, Hayashi 2005)」。YUによって002-003行目で確認要求が行われ、004行目でKNによってそれが否定される。YUは003行目での経験の照会が失敗したために、006行目から異なる参照点(「パイナップル」)を産出しなおすような軌道へと変更している。この実践は「あれ」について何かしらを話すという本題の活動(main activity)に対する、なんらかの準備として理解される。

注目すべきは、これが「パイナップル」に対する同定ではなく、それを「見た」経験の同定であるということである。「見た?」が「覚えてる?」に置換されている環境を見ると、この同定するという活動はまず、うどん屋でもらった「それ/あれ」について話すための準備に用いられている。その意味では、ここでは単に「パイナップル」という物体に対してではなく、「私とあなたが見たテーブルの上のパイナップル」を同定する活動である。

参加者のこの活動を根拠として以上のように考えるならば、見た?-覚えてる?は、この局所的活動においては「パイナップル」の位置を参加者が共通で持つ経験に沿って同定できるかどうか、を問うことに用いられている。

次の断片でも同様に、動詞の置換がターン終了時にラッチングして行われている。この断片では、Lの兄の嫁が非常に性格の悪い人物であることが話された後、その兄嫁の出身が説明されている。出身地はYとLが昔住んでいた場所の近くで、Yはそこに知り合いがいるかもしれないという。

## 断片2. CallFriend japn6805 「知らない?」→「覚えてない?」

- 000 Y: え?なんていう人:?
- 001 L: ヌマヅさん.
- 002 Y: <ヌマヅさん:ε>.hhh あ:::ほんと:::. .
- 003 L: [知らない\_
- 004 Y: [>ひょっとして<あそこにね::,知ってる人居るのよだって.
- 005 (.)
- 006 Y: .hhh
- 007 L: ほんと::. [あそこにほら.hh
- 008 Y: [あたし-
- 009 Y: あそこにね::,お不動態があって:,  
( (不動態の位置が確認される:15行省略) )
- 024 Y: であそこがね:?.hh あの:,第1クラブって言ってタムラの<家の:>.
- 025 L: うん.
- 026 Y: あの::, .h (0.3) ほら, (0.4) 知らない?=クラブって覚えてない?  
027 (0.3)
- 028 Y: 第1クラブ第2クラブってあったの:.
- 029 L: 知らな[い.
- 030 Y: [であの:::, .hh
- 031 (0.5)  
( (クラブで接待業がなされていたことが説明される:7行省略) )
- 038 Y: でそれタムラの家でやってたのね:?
- 039 L: う::ん.=
- 040 Y: =う:ん. .hhh それで::,うちの父なんかも:::,そこで働いて  
( (その場の近くに知り合いがおり、家が十数件しかないために、近くにヌマヅという人がいてもおかしくない、とYが話す。 ) )

026行目がターゲットラインである。この自己修復は、ターン移行適切箇所(TRP)の位置で行われているものである。この位置がTRPであるとの指向は、音声的特徴(ラッチング)が、通常ターンを次の話者に渡さないように用いられていることから明らかである。ここでは、「知らない?」が「クラブって覚えてない?」に置き換えられている。

004行目で相手の話を遮って始められたYの話は、Lの兄嫁のひどい所業に対してその出身地に知り合いがいる=その地域になじみがあることを立証するものである。この立証の活動は、まず、ひどい兄嫁の噂話という大きな枠組み=本題の活動の一部を構成し、さらに、Yがそのひどい兄嫁と過去に接点があるかもしれないことを推測することで、「そんなひどい人がいたことに気づかなかった」ことを述べるものである。

004行目で「あそこ」という指示表現とともに発話され、その説明は024行目まで続いている。この際の「あ」系の指示もまた、「文法的取り込み(grammatical anchoring, Hayashi 2005)」を連想させ、参加者の間でそのことが了解されていることを前提として話を進めているように聞かれうる。言い換えれば「私(Y)もあなた(L)も知っているまさに「あそこ」」について、Yは話を進めている。

しかし、その間、Lの反応は弱く、Yの主張を受け入れているようには聞こえない。L自らが「あああそこね」や「Xのところの近くでしょ」などという事は(この段階では)していないのである。そのことから、Yは指示を続けていかざるを得ない。

自己修復が起こった026行目の特徴に0.4秒の沈黙を含むことが挙げられる。この沈黙は、025行目では、これまで「うん」と反応してきていたLが、反応を引き出そうとするYの「ほら」に反応しないことで、反応の不在が可視化される。このような状況をみると、Yが026行目後半で「知らない?=クラブって覚えてない?」というのは、連鎖の第一成分を産出することで、相手が反応すべき箇所を作り出すことである。

続けてさらに自己修復がなされている。028行目の「第1クラブ第2クラブ~」は、具体例を出して相手に反応を求めることである。相手の反応が029行目「知らない」だった後では、038行目でYは「で」と活動を区切り、「タムラの家」という語を024行目から再度用いて「情報提供」としてやり直している。この「情報提供」で「やったのね?」と知らない相手に説明する際に用いられる形式を用いて、「互いに知っている」という前提を放棄していることにも注目したい。

この局所性を鑑みれば、「第1クラブ」を「知らない?=クラブって覚えてない?」と聞くことは、まず、相手が十分な反応をしてこないことへの反応を追及するような活動であると言える。さらに、本題の活動を行うための前提を作る準備の活動であると言える。

ここまで、断片1と断片2の二つを分析したが、この二つの断片で自己修復が行われていた発話は、「本題の活動のために項目を同定する」という活動という点で共通している。その活動において、「見た?」を「覚える?」、「知らない?」を「覚えてない?」に置換しているのは、この同定の活動にどのように有効なのだろうか。

1つ目は、これが本来の活動から逸れた活動であるという事を示すことができるということだろう。この活動の中心は「覚えているかどうか」自体を問う事ではなく、「同定できるかで話の進め方が異なる」ことである。「見る」「知る」が共通して「覚える」に置



換可能であるということは、「覚える」という述語が「見る」・「知る」ことを含む、より抽象的な高次の動詞(Ryle, 1979=1997, p.68)であると考えることができる。

Ryle(1949=1987 p.278)によれば、たとえば「急ぐ」という動詞は、高次の動詞であり、行為を表しておらず、副詞的な動詞、あるいは抽象動詞であるという。というのも、ただ「急げ!」と言われただけでは、なにを急げばいいのかわからず、結果としてその他の行為への間接的な言及が必要であるからだ。「従う」「試みる」などもこれに当たり、これはさまざまな制約の下でその下の水準の行為を行うことを装飾するものである。

このように考えれば、「見て」いなければ、あるいは「知ら」なければ、何かを「覚える」ことはできない。その意味では、「覚えてる?」という表現が「同定する」という活動によく用いられる高次の動詞という点で、本題から逸れた同定の活動であることをより明示的にすると考えられる。これらの動詞は、まったく別の語群から選ばれているわけではなく、修復前の動詞が後ろの動詞の前提となっているのである。それゆえ、参加者の返答を「見た(断片 1)」「知らない(断片 2)」と言ってもよいのである。

2つ目は、「見た?」「知らない?」に対して、「覚えてる?」「覚えてない?」は、よりそれが共通の経験であることを示すことができる、ということである。どちらの断片も、この二つを見たことがある、知っている、という前提で話を進めている。そして、「覚えている」という心的述語は、それをあなたが経験したことも知っている、という前提の元で話を進めることができる。言い換えれば、単に相手の経験(見たか、知らないか)を聞いてるのではなく、私の経験とあなたの経験の同一性を問う、私も再生可能な通りあなたも再生可能かどうかを要請する述語として用いられているのである。

### 4.3. 進行性の確保と個人的経験の主張

4.2 で確認した断片が「準備」であり、「共通の経験」を同定するのに有効であるのに対し、本節で分析する断片は話者特有の個人的経験の主張にかかわると考えられる。さっそく次の断片を確認しよう。

#### 断片3. CallFriend japn6763 「わかんない」→「忘れた」

000 Toy: [あっ! .hhh あのねえカワニシさん  
 001 Toy: 覚えてるう?  
 002 Yum: ↑う[う:::ん!  
 003 Toy: [タカコカワニシ.  
 004 Yum: うんうん.  
 005 Toy: .hhhh あのねえ,  
 006 Yum: うん.  
 007 (0.3)  
 008 Toy: 富山に帰ったよ.

- 009 (0.4)  
010 Yum: あっ!なんかハワイかどっかで勉強してるとか  
011 Yum: ゆってなかつ[たあ?  
012 Toy: [.hhhh それはやめてえ,  
(カワニシさんがアメリカで博士号を取得した奮闘ぶりが語られる。12行省略。)  
017 Toy: 日本は今就職難でえ,  
018 Yum: ううん。  
019 (0.3)  
020 Toy: .hh いまなんかああ-ええっとねえ:::カミティー  
021 Toy: じゃなくて>>なんやったかな,<<.hhh ええっとお,  
→022 Toy: <カンニ-> なんちゅう>わかん-忘れたけどお,<  
023 Yum: うん。  
024 Toy: .hhhh あのお:::語学学校の先生してるう。  
025 (0.7)  
026 Yum: カンニックじゃな[くってえ?  
027 Toy: [カンニックだあ。  
(Toyがカンニックというような名前だったと確認を与える:5行省略)  
033 Yum: へえ:[:::  
034 Toy: [キタチヨウのお。  
035 Yum: .hh <もったいなあ:::い!>

ここでは、020-024行目の一連の発話中、「なんちゅう(か)わかんないけど、」が、「なんちゅう(か)わすれたけど、」に自己修復されている。

000-001行目でToyはタカコカワニシという共通の知人について同定確認を行う。それが完了すると、008行目でニュースを伝え、010行目で十分な反応が来ないと、012行目からは詳細な噂話の語り始める。020-024行目のターゲットラインはそのような位置にある。

020行目からの発話の構成を見てみると、まずToyは「カミティー」という語学学校の名前の候補を提示し、それが違うと述べ(021行目)、「ええっと」という「想起標識(西阪1998)」を用い、さらに、「<カンニ->」という途中までの候補を出し、「なんちゅう(か)わかん」と言い直し、さらにそれを「忘れたけど、」として自己修復を2段階で行っている。その後、「語学学校の先生してる」現状を述べる。

このように考えれば、自己修復のトラブル源は、今働いている語学学校の名前が出せないことにある。それを「カミティー」→「カンニ-」→「なんちゅうわかん-」→「忘れたけど、」と連続した自己修復が行われている。

この断片の特徴として指摘できるのは、Toyが一言も「名前」という語を言っていないことである。例えば、Toyはここで日本語学校の名前について“思い出そうとして”いるのだから、「名前はなんだっけ」等という事もできたが、単に「カミティー」という(聞き

なれない)語を出すことしかしていない。その意味で、話の中でこの位置で名前を出すのはよくある手続きであると参加者が指向しているといえる。

さらに指摘できるのは、ここで「忘れたけど、」と言って話を続けることは修復を終える手続きを構成しているという事の証拠になる。言い換えれば、これ以上何かを修復することはできない、ということ述べているのである。これは、その場の話を進めるのに充分なことを行ったことを主張する方法の一つである(千々岩 2017)。

次の断片も、同様に「わかん-」が、心的述語「ちょっと出てこないけどねえ:::」に自己修復されている。

#### 断片4. CallFriend japn4622 [今はわかん]→[ちょっと出てこないけどねえ]

((息子が進学しようと考えている学校の授業を、母である L が一緒に見に行ったことが話されている。))

020 L: ((息子が))日本語((の授業))を[見せてくださいなんて頼んでた、

021 R: [んん-

022 R: ああそお:::[う、

023 L: [ううん\_

024 (0.4)

025 R: .hh 私あそこでえ、.hhhh 今その人おしえてるか

026 どうかわからないけどお:::[カールトンでえ、

027 L: [ううん\_

028 L: ううん.=

029 R: =日本語教えてる人<知って>るわよお?

030 L: あらあ!

((どこで知り合ったかが語られる:14 行省略))

044 L: 日本人の先[生?

045 R: [日本人の人->ちょっと名前わすれちゃっく

046 R: [>ただけれども.<

047 L: [ううん\_ううん\_

048 R: 日本人の人、

049 L: 女の先生?

050 R: そう女の<ひ[と>.

→051 L: [ああ::!あの紙にあつ-あのお:::,学校の

→052 L: [プログラムに-.hhhh [な-うん今はわかん-

053 R: [(↑↑ん↑)ってかいた-.hhh[なん-

→054 L: わ-(.)[ちょっと出てこないけどねえ:::,

055 R: [うう::ん、

056 L: .hhhhh(0.5)ああああ\_

057 (0.3)

058 L: 先生の名前の中に日本のお、あのお日本人の

059 L: 女の先生の名前が出てたわあ.

025-029 行目で、Rは、Lが息子と学校見学に行った大学で、知り合い(仮にXとしよう)が教えているかもしれないということの話始める。RはXを知るようになったきっかけを「名前を忘れた」と言いながらも、048行目まで続ける。それに対し、Lは051-052行目でXのことを読んだことがある事を協調的に述べる。053行目はXの名前の漢字の説明であると考えられる。しかし、それにたいして052行目でLは「今はわかん-わ-ちょっと出てこないけどねえ…;」と言い、058行目でXらしき名前がパンフレットに書かれていたことを述べる。

ターゲットラインは051-052-054行目のLの発話である<sup>2</sup>。051行目でLは「ああ…!」と話をはじめ。これは、日本人で女の人が出た話において、その人について何らかの情報を持っているように聞かれうる。さらに、Lは紙=プログラムにその何かが書かれていたことを予示する。053行目のRによる名前の断片的な情報(「(よん)ってかいた」)を聞いた後に、「うん」と受け取り、「今はわかんない」と言いかけて、「ちょっと出てこない」へと語を置き換えている。これは、Rが045-046行目から続けていた名前を出そうとすること、さらに053行目で行った断片的な名前を出すことに対する否定的な反応であると記述できる。054行目で「ちょっと出てこない」ということで、それが「名前」のことについてであるという事が分かるという事は、その前の文脈を参加者が参照していることの証拠となっている。さらに、この断片もまた、「ちょっと出てこない」ということが修復の終了をマークしていることに注目しよう。いわばここでは、「ちょっと出てこないけどねえ…;」ということで、Rが名前を出そうと試みるのに対して、「出てこない」ということで、その試みを終わらせ、この話を先にすすめるという事を行っていると言える。

ここまでで断片3と4とを観察した。そのどちらもが、話を先にすすめるという活動をしており、さらに「わからない(んだけど)」を「忘れた(んだけど)」「ちょっと出てこない(んだけど)」と置き換えていた。では、「話を先にすすめる」手続きにおいて、「わからない」というよりも、「忘れた」ということの合理性はどこにあるのだろうか。

4.2節と同様、そもそも、修復の後方の述語「忘れる」ためには、修復前の述語「分かる」が必要である。そして、「分かる」ためには、経験が伴わなければならない。例えばある人が「梅田の地下/ディズニーランドが手に取るようにして分かる」というとき、それは梅田の地下/ディズニーランドに対する豊富な経験を述べている。ゆえに、この発話においても、修正前の述語(「分かる」=「経験がある」)は修正後の述語(「忘れる」)の前提になっているといえる。この性質を鑑みれば、これは語の「置き換え」ではなく、「上書き(overwriting)」と記述されるべきだろう。

よって、この「上書き」では、話者は「わからない」のではなく、「分かっている」、つまり話者に固有の経験があることを主張しながら、しかしこの場では「提供する必要が

ない=無くても活動を進行できる」ことをも主張しているのである。記憶の心的述語は、この二重性において合理的なのである。

また、断片4が特徴的であるが、「忘れる」と述べる際、時間性を持つ名詞の「今」、程度副詞の「ちょっと」が、同時に利用されている。この二つの言語的要素は、それが「その場限りである」という一時性を表している。言い換えれば、一時的に名前を出す事ができない、と述べているのであり、それは翻って、本来ならば出せたはずである(つまり「分かっている」)ことを示している。

さらに補足的に、いくつか「わからない(んだ)けど」で話が続けられているものについて見てみよう。管見の限り、「わからない(んだ)けど」で話が続けられる場合、「未来」のことに用いられているか、不確定であることを述べることに用いられている。

#### 断片5. CallFriend japn1684 「いつまでいるかわかんないけど」

((Kyoko は Mayumi に手紙を送ろうとしている。しかし、Kyoko は仕事でドイツに行くかもしれないだが、2 か月はまだこちらにいる予定である。))

- 003 Mym: うんほんとそうするこっちのほら住所でもお,  
→004 (0.4)>いつまでいるかわかんないけどお,<  
005 [もしいか-2 か月::ぐらいいるんだったらほら,  
006 Kyko: [うん\_  
007 (0.3)  
008 Mym: ねえ?(0.3)[住所聞いて.  
009 Kyko: [↑ど↑つちかの住所教えてもらえますう?

#### 断片6. CallFriend japn6763 「よくわからないけど」

((Lは帰国した際に風邪をひいてしまっていた。アメリカに戻る際に薬を持って帰ってきた。))

- 000 L: それとあとねえ日本からたくさん生薬を持ってきたん。  
001 (0.6)  
002 R: なにい漢方薬みたいな[やつう?  
003 L: [.hhhh うんなんかあ  
004 L: あのお::[:しょう-もうそもう-漢方薬いうのかな  
005 R: [うん.  
→006 L: >よくわからない[けど<なんか,  
007 R: [°°うん.°°  
008 (0.4)  
009 L: それでえ,ちゃんと煎じてねえエキス[を作つてえ,

このように見ると、「分からない」は不確定なものを不確定なまま話を続けるのに対し、「忘れた」の場合は経験をしているために確定はしているが(つまり「分かっている」が)、一時的にそれを出すことができないということに用いられているといえる。その意味ではクルター(Coulter 1979)が指摘するように、記憶には「ある項目を忘れたからと言って、その知識を持っている主張自体が否定されることはない」という側面と共通している。総括して換言すれば「私はある項目について経験がある。しかし、それを今述べるのに失敗した。ゆえに、さっさと話を先にすすめよう。」と述べることに用いられているのである。

## 5. 結論

本稿では、記憶の心的述語が自己開始-自己修復型で自己修復されている発話を含む断片を、2つのタイプを通して見てきた。

ひとつめのタイプは本題への準備活動に使われ、共通の経験を指向していた。

また、ふたつめのタイプでは、すでに始めた話の途中で行われ、自身の経験を示しながら、ある項目に対して一時的にそれを出すことができない際に用いられていた。

さらに、共通する特徴として、以下の点を指摘できた。

1. 「覚えている」「忘れた」「出てこない」一群の心的述語は、他の行為への間接的言及を含まざるを得ないような高次の述語であり、別の低次の術語(「見る」「知る」「分かる」)を前提としている。これら低次の語を置き換えるために/上書きするために、記憶の心的述語が用いられている。
2. この場合の記憶の心的述語の使われ方は、「経験」という概念を低次の術語に付け加えることをしている。この経験は、同定の活動であれば参与者間で共有されているものであり、進行性を確保する活動であれば話者の個人的なものである。

このことを鑑みれば、語の選択に関する先行研究が示してきた自己同一性や認識のような内的な過程は示されておらず、むしろ、その場の局所的な活動に応じて経験を示す合理性を記述することができた。また、共有されているから/個人的だからといって、常にその経験を出すことができるわけではなく、出す必要がある時、例えば共通の経験を用いて「同定する」活動であったり、固有の経験を主張して「話を続ける」際必要に応じて経験(の記憶)は用いることができるのである。

その意味で振り返ると、今後検証する課題であり単なる予測になるが、あの事故の会見という制度的場面で「こういうお絵かきをしている姿を覚え-印象に残っています」とおっしゃっていたのは、「覚えている」の経験に上書きする形で、動作「お絵かきする」という一部分が「印象に残っている」=この会見で特筆するべきである、と述べていたのだと

理解できる。つまり、ここで被害者ご遺族は、娘の一挙一動を問われれば再生できる経験を持つことを前提として発話していたのだ。

## 引用文献

<和文>

千々岩宏晃 (2017) 「忘れた」ということの相互行為分析：活動進行に必要なかつ十分な情報提供」, 日本語・日本文化研究, 27, pp.128–138.

松島恵介(2002)『記憶の持続 自己の持続』, 金子書房

<英文>

Coulter, J. (1979) “*The Social Construction of Mind*”, Macmillan (=1998. 西阪仰[訳] 『心の社会的構成』. 新曜社.)

Hayashi, M. (2005). "Referential problems and turn construction: An exploration of an intersection between grammar and interaction", *Text - Interdisciplinary Journal for the Study of Discourse*, 25(4), pp.437–468.

Kitzinger, C., & Mandelbaum, J. (2013). "Word Selection and Social Identities in Talk-in-Interaction", *Communication Monographs*, 80(2), pp.176–198.

Kitzinger, C., Lerner, G. H., Zinken, J., Wilkinson, S., Kevoe-Feldman, H., & Ellis, S. (2013). Reformulating place. *Journal of Pragmatics*, 55(July 2010), 43–50.

MacWhinney, B. (2007). “The TalkBank Project” J. C. Beal, K. P. Corrigan & H. L. Moisl eds., *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic Databases*, Vol.1. Houndmills: Palgrave-Macmillan.

Morita, E. (2015). Japanese interactional particles as a resource for stance building. *Journal of Pragmatics*, 83, pp.91–103.

Ryle, G. (1949)"*The Concept of Mind*". Hutchinson. (=1987, 坂本百大[他][訳], 『心の概念』, みすず書房)

Ryle, G. (1979)"*On Thinking*". Basil Blackwell.(=1997, 坂本百大[他][訳], 『思考について』, みすず書房)

Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation. *Language*, 53(2), pp.361-382

## 脚注

<sup>1</sup> 修復組織では、修復を話し手が自ら開始するか、他者が開始するか、また、その修復を自分で行うか(自己実行)、他者が行うかで4つのパターンが観察される。

<sup>2</sup> 045-046行目も「日本人の人」と言い終えるやいなや、「>ちょっと名前わすれちゃったんだけども<」と付け加えて、自己修復をしている。しかし、これは語の置き換え(Word-replacement)ではなく、統語的に情報を付け加えるタイプの自己修復の実行である。